鳥羽屋騒動記　四

へ 13
3382
4

へ 13
3382
4

尾定

鳥羽屋騒動実記巻四

目録

一 清七途中難儀之事
附 金看板清七を助る事

一 吉五郎清七を茶屋へ伴ふ事
附 金看板吉五郎改心之事

大正十年八月廿九日寄贈 本大學出版部

鳥羽屋騒動実記巻之四

清七途中難義之事

附 金看板清七を助る事

殿より追々の侍を挙とらへんとしきりに
て追かくるを彼町人ひしとかまへて
刀をとりはなさずへし〳〵宝を持ち
を振まはしみだりにかゝる所

ありきんだんどうしく殺どし
續くるを人とも襟髪掴ん
で投つけ或はたゝき立て
声をたて其さわぎをしいかう
あいてなる人の奴もしたゝへ
如くの不調法にもせよ郭
誤りのもとと知るもの也
さうへ我もまこゝ武家方と見（六

ここに町もかく亭に徒入ぶ
まりけ方のゆく遊まへいつけらう
弱きし我川く不浄をなくしく
出ものなる武士としい武士らしく
都をて一乏くの病気を付
せう御しも怖ろし郎をと
理非をきらざる人をそれ
さへにくゝまくの我しまらぐ

扨てかくては何事ぞやと立
よつて勝負せんとたつくたてる
町人は腕まくりしてひかへたり
商人の侍たる者におのれ不届
至極の奴ばらはうつべし覚悟致へ
とたちまちぬかんとする所ほとりと
朱翁の方ひとつしぬき給し
たち左右ひしく切てかゝると事な

せば彼方へかくるこし方へうろこし飛
るのこしまる手を持つて寺道をむけ
らふつく御ちくさ女二人はいよし
空まかりすまひしめぐ稽古
のこしく実天石たし切かてむいき
ろひは方いとき人彼方は二人にてま
あてまおりのもちくいゆりこさ事
虚に命へ神ぞれぬしくはくらや

白馬のもとに馳かへる處に
主人の侍大将一人打出る一刀
首を隔のくまづはきしをつき
こしの家ち目ち腕ひとゆつる
つゝ利様をうしゐて押へ一
振うつく敵ちりつせい何りいふて
たまりへさゝ一刀大地にたふれし
くり紙強きと振りしの柄り

川 騎馬出
がん十二番

左りの手をとりる處を並てもゆ
せん體をうせてひしたの剣まい
まるで逆さ目り二万計もあけ皆
されうんとたちるま敷もよこし
二人の侍いよしいつり並と伺ひ
なまでも一刀をうんの若もなく川
ならしくりと切しもく扨もふ
とう伝を服頼のゆうへ呼吸の

はて身さらくのまゝ縁まで三ちんらも
あく洞ときうは附りの町へは
砂うち拂ひまつて多ひ袖く
らるさし奴らを方やしはまうし
殺しても不便と云ふとへじ
てまみくつじもたびたび行き一御
かせて今人をもりまつんと
是迄てとこらまへ投げさんける

主人はありのまゝ事まうし上よや
声かけりやん勢よろこびて入つてくる
皆ち女ちこぞんまわがし悪気も
を抜うち綷て縁をとびおりしかく
突き出しまうし押へとまる一人は
然りの其の頭ひ床へ中し合侍
りしや見えたん薪をと合せて
釣らさしまく湯へさしのへて おりし

今日町人はせくら錦にて衣服を
よそほひは古今とも是非なき所の浄
土宗を不調法なりといふは浄
まりさへされは深く思ひいる座之
と云ものしまりは能しは只今
よ成りいまは浄土宗をも決し
て信じもせいしかれとしかおよ
そ成りて懸度せしうへは初めて

いくはまりの苦集のりつへ路し
の所にもつかふされはの性名を
名字のへいまらしと書写し見彼
信ずれいもまりて浄をとりしと
流しさらい仏のむ極楽の
いらもも念しがふ始めまま入りへい
一念を念じてもささりし帰らい
是ならへとも念じても一人の勧め

浪人の悴なりしが妻子と老母
をふ便と思しめし御けんぐ
さらへば所事も町人の情け
といふ事も知りかけ下さる
りしと高声をはらせし浪らまい
町人ハ打ひ勢の心さけと
いふ事を申しいつし町人の
情とハつゆをも申さてたましてる

短きまてこの者しんぱい
親をと出せしいふハ世にあらしく
定めぬ世の老母の有りしといふ
縁しし御けにしと細ほしてさん
まさ人の推みし刀の身斗を
さやくどうきりたまいしもしくしら
ふしあき扉のこしくよ辞て去りら
叶はぬ縁なり情もいたらぬ墓の心地

かく此方の節に身のたくらみ勢
厚いりとて薬しみにうらいも節
のかくなりいもはかく本心なりて
いろいろに言親御まわりりんらるお
すくらも世間ふうつく自由なりにて
申しといさきらせ大儀りを望
ふりし親御ありいこちいかなりし
まかり

去る頃清七を家へ雇ふ文
附 金看板吉原明細にて文
諸所人へ云ふわりて清七を助け
おふしまず勝手も取て草
我身ろうろしいまさしも
当座の仕付もありその外を
何方の人つくしや提灯を付
来たりつくしと清七の姿を

ふかゝく大包をおくくみちゆく人に捧
を使に来りしものゝ申しけるは川保
かの者に清七申し来りしは源川
仲何令明院殿つかさ伴清七と
申すものなりけるは卿の羅を受
勘当せしものゝのこと浪人
大きり孫蔵の聟なりしく
殊は勘当せしまし老や夫と

さる者は聊けましきりのとを入
さる貴殿はいゝやいゝに清七を
母よく中まへよしのあも父女
さるしきう後いまさ十代のお杏
より父母の夫まくに育てかひ
しゆん当いゝ申しと思ひや
聊りう母りしと人と知りまけ
かしい孤生への無きりし諸ぐん

もしりふ時に孝弟しく親子の
縁を切らしいよく〳〵の事なり
俗にいふ親の子を見ぬ迷ふは
子が親をおもふハ孝行なりといふ
引ぎわるま斎戒の嫡を撰ぶるな
まいりてあらはに不孝のの
そまつしい多く孫よりも不孝者
たち賢の忠くまつし史として云ふらしハ

父しく敬けまし祖は天なハ又
道しあらぬハ父母ハ師匠しるべし
も学も行ての有きてそのうへまで
毎り衣服酒なれともかくせて
定めし金子のもあいらしあらん
よくもあるさ世忠之さまでも天
のやしらぬなく口ハ今のしくく
今の侍が天まうるその言の

不孝をこのしめるハへきよくし心
に緩し申候人々は如何しくまいらせ候
ともがらひはうへい何を仰られ
家ハ何をいさせ妙まよし様将は清七
もろつと兄ひ被よきてうらくやし／＼
ふい義事しいさるをやらのた
不孝ゆへ勘當受しと相何し
何しもやむものゑへしもまう付しまく

親類ハ災難よく勘當受し身の
うへにおよ候てかしら大恩におゐて
うき如くよ心ろもやらてんい何も
年来一字く存まりハ御年寄の
うへの不忠一族一家ハ申付
入下さりへくしと候よりて
次第恭敬の計しひより吉例の
一筆まいて御くらくうらくまり候

つくしとせ悪をうしろへいへるも
誠なんと思ひけん其日頃ハ
飲食なしいたつら逆ふかが誠ありつ
むかしも害の毒を与えついてい
悟むつさきのいさかいかにもせん
そもては付て思ひ止やいは御ぞ
貴度ゑ誠ハ孝ならず斯師ハ
受し孝なしい物うく親不孝

所させて信のためつ一命をうしも
我じるつきを天道四海所まで
我しをとくつく助けしめさふと
う請なりまして其ゆうなれハこの術
此様ハ誠にハ不肖なるまで親
孝けり君を助け不孝者とこう
さんとして不孝が大親へのつら
そうこが将まて一命を判るへしも

香はし樒くハ是(?)りて新中(?)飛(?)ニて
東天竺国(?)り栴檀をはじけるく
世を渡る者を持とはしめけるに
鶴も角もなきや根又なきば
我家(?)へ来(?)りたるへと祈る(?)田(?)よ
勝(?)りまかりしは清七はしめて
中(?)東南(?)へり君(?)をあつめし
栴檀板の脇(?)くしまいし中太こさ(?)ま

様(?)ニ御(?)気ずりなてこ(?)ぶ者(?)なり(?)が
詞(?)りいかく(?)なる牛頭栴檀伽羅の
御(?)人者(?)まゐりとして身(?)おいなし
上(?)別(?)なる(?)石(?)まさ源(?)流(?)を(?)中(?)国
釼(?)の浪人(?)仍(?)りかしもう試(?)在(?)乃
むかしけ仍(?)りく西(?)道(?)見(?)意(?)り勤め
能(?)く侍(?)ぬるすしら斗(?)しなる(?)模(?)様(?)
みく(?)[illegible]へやなるく玉(?)勇(?)なりして

遠国より住居せんも心安く許し
おかれ候しとて別相生か
新町に細年の縁父かつけし
家ろ背なり當時諸所中に無と
渡世なく福者にくらし居なる
あたりや三左衛門といふ者あし
を役り新町へ属付して背
三左衛門といふ者の直きうくきく

月く何ぶ世話をやりても居が
さくいまま渡世の尼も又よ知らる
未年大へ上りて変なく日本茶るを
少伝村といふ知りいきちの田地
を買て百姓となりて暮しくる
今に於て吉左衛門といふ人の弾なり
當年三十才まで吉と細ともに
此件の米家をたのしく住い

爰に武士ありし招れも行ずして
大夫へ帰参せんとのみ思ひし兵粮
は是非なくをかのまゝに浮年月
を送りゆく内に光陰矢よりも
はやく流れて九ヶ年をおくりて右
の娘十三歳になりけるが生質よく
幼稚なるへ為の為十六七才
めしく能く縫針清らかなる

天晴武夫の娘なりければ
百姓の小伜といへとも一村にも
はおよびなきを思ひこゝろ付てこ
意をつくし結納をこしらへしも孝
ゆかしく七十才なりし父母の
こゝろよに省く事も暑き夜も
の孝子橋と隠れなし雪中筍
をかしこみしも猶ゆかしく常

まことは引路なりしかどもくもざくら
栴檀は二葉よりかうばし風流の道
子の中よりすぐれ兄弟にまさり
といへども生れつきの小児誕生まれ
天下に英名を輝かし生涯
男をそぐしと届世しぞかしや
しらぬ町ふもとまで聞えたりし
格別なくしも

豪傑の此人ありしは何かう浪人
江戸芝口にて大経様の杉ちかけ印
新からねのさく取扱も俗はじめまし
帯刀此先にてあ起しく色相尾の
家の紫山の安さ流せしも流
此忰ぐ忠義えうまでとやまの
男達らしく合く男立し浪つる
其の流仙庵流の浮世御年を 男

之能名せられし雷布ゆゑ汗を桃下
安の邪波の織物笛のこゝろいと恩ましま
能くゝる出陳みりくいしら彩りきよ
引わいゝふを男達ならしいたう
見達せりしいとかしこく蜘蛛
兆れとしつ下し花し加文吉ながら
近て年売てけるうふ弁風に粧
の如妝漸しは一日粧うのい髪を

送りゝの如代々わして渡世よ
おもひいろよ良けしと病おもり候よ
備衰のこゝろ解ても今いおもゝの
けらうを新妙ゆる花しかいやよ
おもいしを妻もたゝゝり鰥こと
しく看病としとも医者を頼と
薬用まであきらかし以へしもさらしに
こゝ絵あしくてし験病りしくてなむ

つゝしく医師もこゝろをつくし八日の
うちみの術も少なく妙なる薬をも
く験ことさいそん方なく時は近い神また
私つゝしみ勧めしも心をさむく先
十三才の春より毎朝しこゝろを浴
びそのうへ相生町六丁目の天満宮
へ新制なし往来父の中気平
願かけしおりく万一之聖業をかけて

私の寿命をちゞめて父を助けたまへと
一身をなげうちて誓願文の誦経
をとなへし祈のしるし有けるにや
猶も世の中の人々はあらそひ
別て是を孝子のしるしとうらやみ
是よりそのほか国村より常住庵
とかく薮医者なる藤根湯の加減し
きらいまぜしめぬ人先生見て中気病と

いへハ頭痛(づつう)とも腹痛(ふくつう)ともいへとも心腹(しんふく)
せめてハ吾(わが)たしなみの前(まへ)を思(おも)ひ
かゝりさずして立(たち)かへりて病(やまひ)を起(おこ)すく
すれハ先(せん)心(こころ)孝(かう)をつくしまもりても
一生(せう)のうちにハ六十(むそ)しくなにほどの保(たも)ち
息(そく)の浮(うき)世ハあるまじきうし受(うけ)合(あひ)もしく
まづしけ者(もの)病(やまひ)のせんくと天窓(てんまど)を
さそうて中(なか)ハ妻(さい)ハしまで知(し)り

ある仏壇(ぶつだん)ありてハよくよくきよくしたり拝(はい)さへ
しかるに吾(わが)身(み)ハ父(ちち)の師(せい)に親(おや)の
忝(かたじけな)く思ふハ子供(こども)何(なに)に逆者(ぎやくしや)でさへ
まかりしハ仏(ぶつ)もかねてもおそへしく
只(ただ)へも我(わが)身(み)を逆者(じや)いかに勤(つと)め
て世(よ)の人(ひと)のわか身(み)ハたゞまよひ
うひて其所(そこ)へこゝろざし仏前(ぶつぜん)に向(むか)ひて
叮嚀(ていねい)に拝(はい)合掌(がつしやう)し膝(ひざ)つきのゆるしをる

かくおほしめしけれは利角ありとこそきこゆれ
いの御前にも仏をたのへとし宮
しかのことくみたりに釈をも
くまへに儒道はいさめて女院一すち
の勝負もくし係し仏大師の事
とても論し方は成りかたし
さりとも邪正のうらへいかゝいはん
人は儒道と仏とはいつくもなかりけれと

まかしくまて下り
後の君めしたる尚しゆめん
ありし時御一人入りまして水
を出してすゝと法りを論と述られけり
儒道かりはいさかし仏経あり
ふれし仏者大切まさりし
さるうちよ世の中に仏とらも経
まさけなきのいなし行いそく

却て此鄕(きやう)ハなせよもしもたで
今迄の家(かう)を此用(から)ひゆへいまち
まち合快(きんきやういうけ)及会(くわい)中も基ましも古(こ)の
くきりハ今子(きんす)三面稽(けい)古(こ)して申し
三帖(でふ)寄星ハとても此用(から)ひまハ寄(きい)る
ましく相(さう)し筆(き)の毒(どく)之と敷(じんあん)ゝを
又くり今(いま)の出来(でき)ぬと都(とし)知しく
取(と)りもせぬ嘆(きこし)きをいひたる

若き御は絵(ゑ)を書(かき)小鼓(こつづみ)をもてあそび
ばかり家(け)の名(な)をくへ出来(でき)ゆへいとつの両(りやう)
家(け)ハたへんややめ色(いろ)ちも名(な)をよく
此相(じやう)家(か)ありんゆて渡世(とせい)の事(き)の家(き)
おき遠(ゑい)くて調(てう)法(はう)しくもせるこし
そし嘆(ゑ)ふひく角(かく)りゆる許(ゆる)り衣
らし御ハ小謡(こうたい)を傾(かたむ)け寿(じゆ)楽(らく)しう衣
しろりもしり記(き)くくま両(りやう)向(むか)ひ今日

伊藤屋の何がしとて三男の
今までは病身にて今度の京
もはやなしさりけれどもまだ
無断もなし今で來てけれ
調法せぬまゝここにてはかしくは
きうとして行方へ先ん京々所々も
ねがしさんぼふ相生の御父らいは
父さまの身のまゝならや今家生

の婚ははるく跡またもかゝ生涯の中
こりは夫婦あさく世間はうけもうしく
とやまは此法まさしらしきさるす
も所まうしくれ新町へまいら候くと
やにまる毎は殊とふういやしくらう
方は初の月しへまいらも御父の身ん
去らく來しとつゝく三男は折ふら
一方ても從みず言きたひなし様ま

頑鈍庵の語りしをきゝてかしこまりしも不
分明之さたなれハ左右が方奴とききハ
父上の存と聞ハ如何いたしけるや
との業ましまさんと問そまゐらう
此者柳と傳んの秘密へつらひと
素く上をなほしとも存しあいおもひハ
亡の内気なりくハ父の此身まゐりて
元我も心かうへ取へ入るへく参る

亀しとを白いつもうう念慮
付添く取ま入く父の枕もしにいる
とゆを村事尾との娘に縁
う気りかうし取りかしのうち
叶ま気りても思ひうらんやと
様ぶとを添ひ帰りてそやみる

名月尾張新宗紀巻之四終

酒 季 谷
尾定